農林水産大臣賞受賞

地域農業の維持発展へ
～農地を守り、地域に活力を～

受賞者　農事組合法人ひじきファーム（のうじくみあいほうじん）

（三重県伊賀市（いがし））

■　地域の沿革と概要

伊賀市は人口約９万人であり、森林が全体の約 61％を占める一方、農用地が約 13％、宅地は約５％である。北東部を鈴鹿山系、南西部は大和高原、南東部を布引山系に囲まれた盆地が形成されており、低地や台地は少なく、丘陵地が多い。ごくわずかな平地の中心には、古来、旧街道の宿場町や城下町であった市街地が広がり、その周辺に農村集落と農林地が見られる。

年平均気温は 15.3℃で、夏の蒸し暑さと冬の底冷え、朝夕の気温較差があり、寒暖の差が激しい、典型的な内陸型の気候である。年間降水量は 1,722.5mm、県内では降水量が比較的少ない地域でもある。

第１図　位置図

■　むらづくりの概要

１．地区の特色

農事組合法人ひじきファームが活動する比自岐地区は、近年は人口減少、少子高齢化が一段と進む典型的な過疎地域である。

当地区の所有耕地面積、人口、世帯数は、104ha、433 人、180 世帯で、うち小学生が 10 名、65 歳以上が 258 名（高齢化率も 55％）である。そして、市の校区再編計画により小学校が統合され、100 年以上続いた歴史ある小学校は休校状態となった。

耕地のほとんどは水田で、水稲作中心の自然豊かな農村地域である。水はけの悪い湿田が多く、水稲以外の作物が育ちにくい土地柄のため、高収益が期待できる野菜等の作物の導入は厳しい。野生動物による農産物の被害が年々深刻化しており、収穫減がもたらす生産意欲の低下も懸念されている。

地区内外には多数の古墳が点在しており、更に伊賀市無形文化財に指定さ

れている「比自岐神社祇園踊り」などの伝統文化もあり、歴史の古い集落である。

２．むらづくりの基本的特徴

（１）むらづくりの動機、背景

平成 16 年 11 月に伊賀市が誕生し、新市将来構想や新市建設計画に盛り込まれた自治の仕組みを担保し、市民が主役となる自治を実現するために、「伊賀市住民自治基本条例」が同年 12 月に施行された。これに伴い、比自岐地区では、平成 17 年２月に「比自岐地区住民自治協議会」を設立し、地域のまちづくり計画の検討に着手した。その中で、農林業を素材とした交流事業に取り組もうとの提案があり、三重農林水産コーディネーターのアドバイス・橋渡しにより、平成 17 年に鳥羽市答志島の答志町と、山の比自岐（ひじき）と海のひじき（海藻）を掛けた「ひじき交流」が始まった。人や文化の交流から始まり、特産品等の経済的交流に発展してきている。

一方、高齢化、後継者不足、過疎化の進展などにより農地の維持や、むらそのものの活力低下が懸念される状況にあったため、農地・集落を守ることを目的に、地域住民の話し合いにより平成 23 年に当法人が設立された。当法人は、水稲以外の適した作物がない、獣害の多発、農業従事者の高齢化、後継者不足等から離農、規模縮小などの地域の課題に対し、恵まれた自然、豊かな食、地域コミュニティ等の地域資源を活用しながら、高齢者や女性が活躍できる新たな産業を興すことを念頭に、下記の経営方針のもと、地域の活性化に向けて取り組んでいる。

＜経営方針＞

・農作業、経営管理等が適切にできる組織にする
・経営状況を明瞭かつ明確化する
・地域に適した作物の選定、新たな販路の開拓をする

（２）むらづくりの推進体制

ア　組織体制、構成員の状況

・代表理事１名:理事の互選により選出
・理事９名（うち女性１名）
・監事２名：法人の財産管理、業務執行の状況確認、総会での報告
・委員７名：法令に基づいて行われる行政処分、定款及び総会の決議の遵守、法人の職務の遂行
・構成員 160 戸（集落 180 戸ほぼ全戸で構成し、設立当時から員数の変化なし）
・構成員のうち９名はオペレーターとして農作業に従事
・地域住民の参加を基本に、出来る間は自分でやるとの方針から、現在、水田の管理・作業出役等は 60～80 歳代の約 50 名が活躍している。賃金を得て働くことが高齢者のやりがいと健康づくりとなっている。

イ　連携してむらづくりを行う団体及び行政との関係

①　比自岐地区住民自治協議会

「コスモスまつり」や「ひじき交流」の開催など地域にあったまちづくりを行っており、当法人はこれらイベントについて連携して開催している。

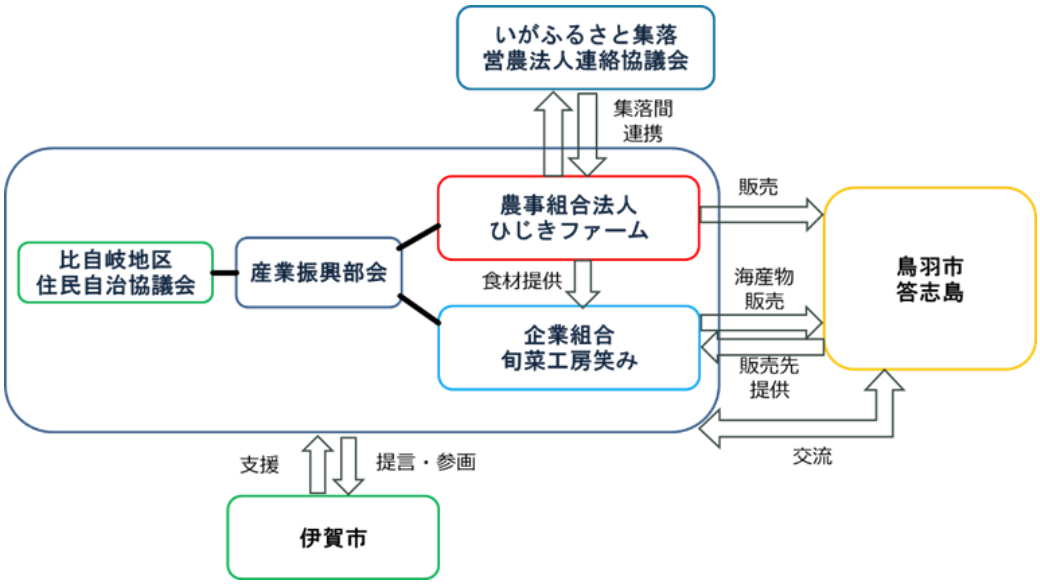
②　伊賀市

比自岐地区まちづくり計画を基にして、安全安心で自然と融合した心豊かで活力ある暮らしづくりができる地域社会の実現に向けて、課題等の共有を図り、連携している。

③　企業組合　旬菜工房笑み

地域の農産物の販売と農産物加工品の製造・販売を行う。設立時には、当法人の出資を受けて加工施設が整備された。

第２図　むらづくり推進体制図



■　むらづくりの特色と優秀性

１．むらづくりの性格

「地域の農業を地域で守る」という理念のもと、農事組合法人として集落の農地保全に地道に取組み、次世代に農業をつなぐ仕組みづくりを構築するなど農業の継続・発展に尽力している。さらに、こうした農事組合法人としての役割を超えて、交流・６次産業化などによる地域振興にも取組んでおり、集落の維持発展も当法人が実質的に担っている。これら農地保全や地域振興などの取組は、女性や高齢者を含む地域住民参加を基本に展開しており、この結果、農地及び集落が守られ、女性や高齢者の生き生きとした活躍に結びついている。

２．農業生産面における特徴

（１）当該集団等の農業生産、流通面の取組状況

ア　農地中間管理機構の活用

農地中間管理事業を活用し、高齢化により農業の継続が困難となった農地を条件の優劣を問わず借入れ又は購入し、積極的に地域の農地の集積・集約化に取り組んでいる。その結果、経営面積は平成 23 年設立時の 35ha から令和２年度末時点で、比自岐地区の 66%に当たる 74.5ha となり、比自岐地区の荒廃農地はほぼなく、美しい水田景観がつくられている。

また、近隣の経営体（H ファーム）と農地の調整・棲み分けを行い、比自岐地区を含む周辺農地の８割強を２経営体に集積している。

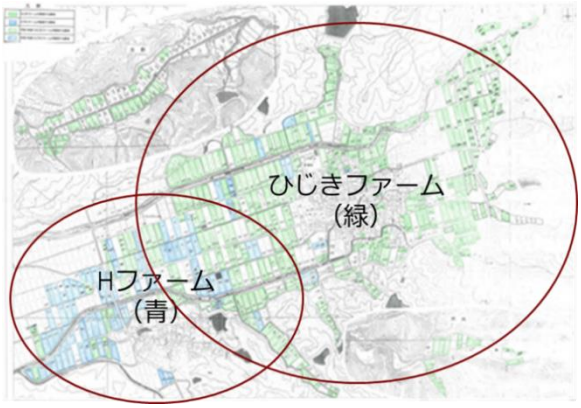
イ　ブランド米及び多様な作物の生産

収益の増加を図るため、水稲（伊賀米）、小麦、大豆の栽培のほか、水稲種子、飼料用米、ナタネの栽培を行っている。地域柄、集積された農地は湿田が多く、野菜等の高収益作物の栽培には不向きであるが、収益性が高く、獣害に強い新規作物の導入に向け、補助事業の活用を視野に入れながら、地域に適した有望な作物の選定を進めている。

（２）生産力の向上、生産の組織化、生産・流通基盤の整備等への寄与状況

ア　経営基盤の強化

第３図　集積、集約化した農地



水稲、麦、大豆のブロックローテーションに取り組み、積極的に農地の有効利用を図っている。水稲栽培では、「基肥一発肥料」の施用と無人ヘリの薬剤散布により、効果的な病害虫防除で農作業の省力化を実践している。

近年、比自岐地域では、野生動物による農作物被害が増加していることから、当法人は獣害対策にも積極的に取り組み、水稲種子や飼料用米、ナタネ等の栽培を行うことで経営基盤の強化を図っている。

イ　近隣地域の経営体との連携

伊賀市には 20 余りの集落営農法人が存在しているが、近年は役員の高齢化に伴い、経営の存続が困難となる法人が増加している。そのような状況下で、当法人は集落をまたぐ周辺の集落営農法人等と連携し、効率的な農作業受委託の推進とコスト低減に取り組みながら、共に生き残る方法を考え、広域的な地域の活性化に取り組んでいる。当法人のある JA いがふるさと上野南支店管内では、集落営農法人が９経営体あり、定期的に連絡会を開催し、情報共有等地域間交流の体制を作っているほか、肥料、農薬などの資材の一括購入、各経営体の持っている施設・機械の共同利用などで低コスト化を図る取組を進めている。当法人の代表理事

である田中氏は、「いがふるさと集落営農法人連絡協議会」の会長でありながら上野南採種部会の会長も務めており、集落間の連携を進めるうえで重要なけん引役となっている。

（３）経営の改善、後継者の育成・確保、女性の経営参画の促進状況

ア　企業組合「旬菜工房笑み」

当法人の女性理事が中心となり、平成 26 年に加工部門を担う企業組合「旬菜工房笑み」を設立。当法人が出資、加工場を整備し、共に地域の活性化に取り組んでいる。地域の農産物を活用した五目豆等の惣菜、こんにゃく、漬物等の加工販売を行っており、地域の女性たちにとって生きがいが見いだせる大切な場となっている。

写真１　「ひじき笑みの市」の開催
（答志島の海産物も販売）

鳥羽市答志島と比自岐地域でのひじき交流を通して、海、山それぞれの産物を活用したコラボ商品「茎わかめとしいたけの佃煮」「ひじき入りこんにゃく」等を商品化し、伊賀地域の飲食店・観光施設等で販売している。

写真２　答志島とのコラボ商品

イ　法人の後継者育成

役員の高齢化が進んでいることから、将来を託せる後継者を育成するため、令和５年までに３名の常時雇用者の確保を計画している。その実現に向けて、年間を通じた仕事が確保できるよう、育苗施設を建設し、トマトなどの施設野菜の作付けの準備を進めている。令和３年度に地域外の２名を雇用し、農産物の生産の業務に従事させながら経験を積ませており、３～４年先には作業計画の作成、転作作物の選定などを担わせる体制を目指している。

３．生活・環境整備面における特徴

（１）生活・環境整備面の取組状況

ア　環境保全型農業

地域の小字程度の区分ごとに、毎年１筆単位で土壌診断を実施し、結果をもとに、10a 当たり 100 kg程度の市販の土壌改良材を施用するほか、小麦作付け後の全圃場と、飼料用米の作付け後の一部の圃場に鶏糞たい肥を散布し、土づくりに取り組んでいる。また、温湯消毒による種籾消毒を行うことで化学農薬と化学肥料の削減を実施し、地域ぐるみで環境保全型農業を実践している。

（２）生活条件の改善・整備、コミュニティ活動の強化、都市住民との交流等への寄与状況

ア　コスモスまつり

写真３　コスモスまつりの様子と管理しているコスモス

コスモスまつりは、コロナ渦で開催を自粛しているが、近隣の県外観光客を含め 3,000 人規模を集客する定着（27 回開催）しているイベントである。休校となった比自岐小学校の運動場、小学校の周辺農地で行われ、もちつき実演試食 足湯・手裏剣打ち体験・地酒試飲・伊勢えび汁等のサービスコーナーのほか、比自岐神社祇園踊り、比自岐音頭、ダンス、バンド演奏等が行われている。当法人は比自岐地区住民自治協議会と連携し、ナタネ後の水田（2ha）を提供し、耕起・草刈などのコスモスの肥培管理を担当するほか、まつりで伊勢エビ汁セットのごはんを提供するなど、準備・運営両面での実行部隊となっている。

イ　ひじき交流

ひじき交流は、「山の比自岐」と「海のひじき」を掛けて、鳥羽市答志島と行っている地域間交流。人や文化の交流から始まり、女性や高齢者が中心の朝市活動「笑みの市」では答志島からも海産物を持って参加してもらうなど、次第に経済的交流に発展した。海の幸（特にちりめんじゃこ）、山の幸（特に米）の注文をとりまとめ互いに郵送しあっている。夏には、比自岐からは日帰りの海水浴ツアーに 40～50 人が参加し、答志島からは比自岐の祇園祭りやコスモスと麦の種まき等、子どもを中心とした活動を行ってきた。また、漁協の協力により海の環境についての講演会や魚のさばき方教室を比自岐で開催する他、全国的にも有名な答志の神祭の見学等、相互の文化交流を行ってい

写真４　答志島との交流（比自岐祇園祭）

る。ひじき交流は比自岐地区住民自治協議会の主催とはなっているが、交流イベントについては当法人と旬菜工房笑みが中心となって企画・運営を行っている。また、前述の「旬菜工房笑み」による答志島とのコラボ商品の加工・販売、特産品の相互郵送など経済的交流についても中心的役割を果たしている。

写真５　答志島との交流（魚捌き教室）

ウ　休校舎等の管理

当法人は農地のみならず、休校となった小学校や以前 JA が使用していた建物についても、放置していると荒れてしまうため、比自岐地区住民自治協議会と連携して管理している。それらは、当法人の事務所として利用しているほか、地域住民の交流の場として活用されている。

（３）地域への定住促進、女性の社会参画の促進状況等

当法人では、雇用者３名を確保し将来的に経営を任せていく方針で、年間を通じて仕事を確保するために、育苗ハウスを建設し、施設野菜の作付けを検討している。そのハウスを活用した一般農業体験の実施も検討しており、地域への定住に結び付けていきたいと考えている。

当地域ではコスモスまつりなど地域活性化のための活動を推進しているが、高齢化が進み若者が少なくなり、地区の祭りや伝統行事や世代間の交流ができない状況になりつつある。

小学生によるコスモス種まき体験などの老人からこどもまでの作業の交流や鳥羽市との農村文化と漁村文化との交流を行うことで、地域内交流活動による活力やふれあいのあるまちづくりを目指している。